



群馬県立
吉井高校

総合学科の進路指導

毎日の活動を蓄積する 「夢ファイル」の軌跡から 自律する力を付ける

◎2000年度、全日制普通科から単位制総合学科となる。数年前から、2年次以降に選択する「系列」の見直し、部活動の活性化など諸改革に着手。「花いっぱい運動」や募金活動、地域活動支援センターと連携したボランティアなど、社会奉仕にも積極的に取り組む。

設立	1975(昭和50)年
形態	全日制・単位制／総合学科／共学
生徒数	1学年約150人
11年度入試合格実績(現役のみ)	国公立大は、群馬大、高崎経済大に3人が合格。私立大は、関東学園大、共愛学園前橋国際大、桐生大、高崎健康福祉大、埼玉工業大、城西大、駿河台大、大東文化大、大妻女子大、実践女子大、東京電機大、長野大、京都文教大などに延べ35人が合格。
住所	〒370-2104 群馬県高崎市吉井町馬庭1478-1
電話	027-388-3511
Web Site	http://www.yoshii-hs.gsn.ed.jp/

変革のステップ

<p>背景</p> <p>◎科目選択の指導が十分でなく、服装の乱れも見られ、地域住民の評価も低下。定員割れが恒常化する</p> <p>STEP 1</p>	<p>実践</p> <p>◎「系列」の見直し、ガイダンス室設置、ポートフォリオの導入などにより、履修指導・進路指導を充実</p> <p>STEP 2</p>	<p>成果</p> <p>◎最後まで諦めない粘り強さが身に付いた。就職希望者は全員内定を獲得。教師の意欲も向上</p> <p>STEP 3</p>
--	---	--

生徒指導と履修モデルの見直しから
学校改革を進める

群馬県立吉井高校が改革に着手したのは、5年前。同校は2000年度に普通科から単位制総合学科に改編された。生徒の多様な進路志望に応える教育活動が期待されたが、改編から数年を経過した頃から指導体制のほころびが見え始めたという。当時、生徒指導主事だった鎌田英喜先生は次のように振り返る。

「選択科目は多いものの、生徒が将来の志望に応じて科目を選べるような履修モデルはなく、生徒の主體的な選択を促す指導も出ていませんでした。生徒にとっては選択の幅が広すぎて、かえって履修科目を絞りきれない、あるいは苦手な教科は最低限しか選択しないという弊害が出始めたのです」

科目選択の問題と併せて、生徒指導上の課題もあった。同校は総合学科への改編時に、県内では珍しく私服通学が許された。科目選択の幅広さと共に自由な校風の象徴であったが、徐々に服装に乱れが出てしまい、地域住民の不評を買うまでになっていた。地域からの信頼は次第に低下し、定員割れが恒常化した。

そうした状況を打破しようと、改革は生徒指導から始まった。07年度、それまで式典以外は原則自由だった制服の着用を義務化した。特に、1年生にはスカート丈を短くできないデザイン

の制服を新たに採用した。

「生徒指導と学習指導は両輪です。生徒自身が生活をしっかりとコントロールして、落ち着いた環境で学習することで、初めて自分の進路を真剣に考えられます。朝、制服を着てスイッチを切り替え、真剣に学習に向かわせることが、全ての取り組みの土台になると思っています」(鎌田先生)

教育課程の見直しも進めた。履修モデルとなる八つの系列があったが、目指す進路との整合性が明確ではなかった。そこで、07年度入学生から系列を四つに絞り、必修科目を増やして偏りなく基礎学力を身に付けられるようなカリキュラムとした。



群馬県立吉井高校校長
関根正史 Sekine Masashi
教職歴35年。同校に赴任して3年目。「教育とは夢を語ることである」



群馬県立吉井高校
鎌田英喜 Kamata Hideki
教職歴20年。同校に赴任して10年目。進路指導主事。「明るく、正しく、全力で取り組み、思いやりを大切に人間を育てたい」



群馬県立吉井高校
小井戸正裕 Koide Masahito
教職歴14年。同校に赴任して5年目。総合学科推進部長。「生徒が総合学科に入学して良かったと思える学習をさせたい」

「YP2011」を発足し 総合学科としての特色を追求

総合学科の弱点を克服すべく改革を進めていったが、新たな課題が生まれた。総合学科推進部長の小井戸正裕先生は次のように話す。

「学習指導をより充実させるため改革を進めました。逆に総合学科らしさが薄れていった面もありました。学校が落ち着きを取り戻した後も定員割れは続き、地域や中学校に対して本校の何をアピールすべきか、次の一手を探しあぐねていました」

改革を加速させたのは、09年度に赴任した関根正史校長だ。有志の若手教師14人による「吉井プロジェクト(YP)2011」を発足させ、改革の具体案を策定し、3年計画で推進することにした。関根校長は次のように話す。

「教師には皆、自分の学校を何とかしたいという気持ちがあります。特に本校には、方向性を見いだせず考えあぐねているもの、改革に意欲的な教師が大勢いました。自ら動くべききっかけさえあれば、必ず改革は成し遂げられると感じました。また、本校は前身が普通科であるため、総合学科としての特色を出しにくい半面、しがらみがなく何にでも挑戦できる利点もありました。総合学科だからこそ、今の時代に求められるキャリア教育が実現できるのではないかと考えました」

最大の課題は、総合学科としての特色を打ち出し、いかに学校の魅力を高めるかであった。教師は何度も話し合い、先進校の視察を重ねて、改革の方向性を模索した。

「良い教育を行うには良い教師を育てることが何よりも重要です。そこで大切になるのは、教師自身が自分で考えて行動し、自分たち自身で鍛えられるような環境をつくること。『YP2011』では、グループワークを『セッション』と呼び、先生方が自由に意見を述べ合えるようにしました。この経験が先生方の創造力や企画力、指導力を高める上で大きな土台となりました」(関根校長)

総合学科推進部主導で 履修ガイドダンスを強化

「YP2011」での討議の結果、次の2点が打ち出された。一つは普通科時代からの伝統である部活動を再び活性化させること、もう一つは総合学科の良さの見直しである。

部活動については、入学時点での意識付けにより加入率を高め、専門家を招いてのスポーツ栄養学やメンタルトレーニングの研修会の開催、部活動対抗の駅伝大会やボランティア活動の実施などで再活性化を図った。

総合学科の魅力を高める点については、「総合学科推進部」を設置し、制度を見直した。

最も急がれたのは履修ガイダンスの充実だ。それまで履修指導は担任が行っていたが、経験や生徒の志望する分野によっては指導しきれない部分もあったからだ。そこで、10年度、ガイダンス室を設置して担当教師を配置すること、いつでも生徒の履修相談に応じられるようにした。部屋には、受験や就職に関する資料と、生徒が科目選択をイメージしやすいよう、それぞれの授業で使う教科書や問題集、授業の様子を撮影したDVDをそろえた。更に、生徒の主體的な科目選択を促すため、系列の特徴や全科目のシラバスを記した「ガイダンスブック」を生徒全員に配布した。こうして、組織的な履修指導を行う体制を整えていったのだ。

「夢ファイル」に日々の活動を まとめて、振り返る

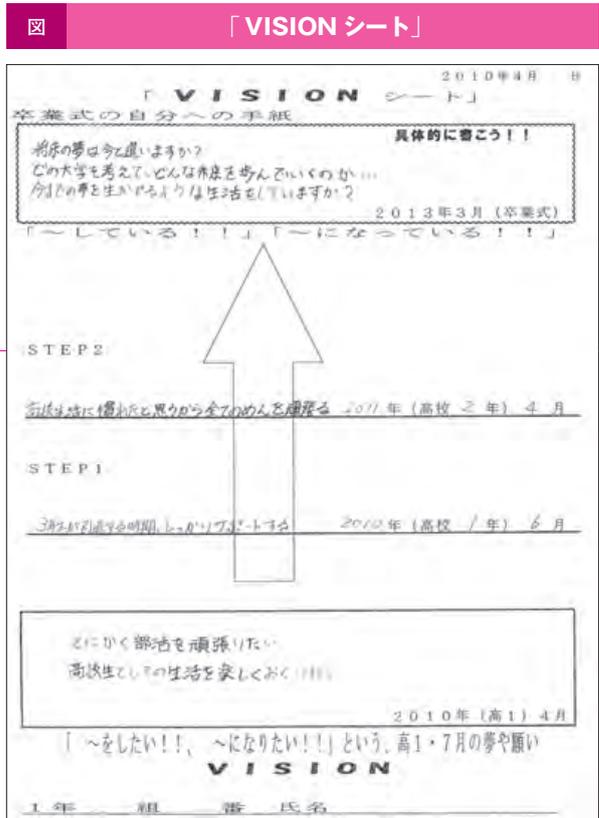
自分に合った進路を選ぶためには、生徒が自らを振り返り、夢や適性に応じた志望を描くことも大切だ。09年度の1年生から始めた「夢ファイル」は、日々の活動で何を感じたのか、それがどこへつながっていくのかといった活動の軌跡を、生徒自身でつかむためのポートフォリオだ。生徒は年間2冊のファイルを用意。1冊は時系列で記入の度にとじる仮のファイル、もう1冊は蓄積した用紙を学年末にカテゴリー別に整理するためのファイルである。

ポートフォリオ

オという、全ての生徒が決まった用紙を同じ順番でファイルリングしていく場合がよく見られるが、「夢ファイル」にとじる用紙は基本的に生徒自身が決める。学校が配布したプリント、LHRで取り組んだワークシートや進路講話などの感想文、定期考査の結果や部活動の成績表などさまざまな都度、取り組みに対する自分の感想を付せん紙に書いて貼り、何を感じたのかを振り返られるようにしておく。

ファイリングするのは、学校での活動にかかわるものだけではない。友だちと撮った写真や雑誌の切り抜きなど、個人的なものにとじてもよい。私生活を含めた、その時々で自分自身を振り返ってこそ、今の自分を把握できるからだ。

こうして順次ファイリングしていき、学年末には自分の進路を考えるために必要なものを整理用ファイルにまとめる。最終的には3年生での進路選択時の検討材料にしたり、AO入試や



下欄に今抱いている夢や願いを、上欄に卒業時点の自分へのメッセージを書く。そのため何をすべきかをSTEP 1、2に記入する。具体的な進路が描けなければ「勉強と部活の両立」といった身近な目標でも可。目標に向かって日々の生活を充実させることが重要だ *学校資料をそのまま掲載

生活を自身でデザイン できるようになることが重要

就職試験の志望理由書を書く際の資料として活用したりする。

過去を振り返るだけでなく、将来を見つめさせることも「夢ファイル」の重要な役割だ。そのため書式が「VISIONシート」(図)である。「卒業式の自分への手紙」と題し、高校卒業時に向けて目標を立て、そのために何をすべきかを考えることが目的だ。学年統一の書式として年度初めに記入させ、「夢ファイル」の1枚目にファイリングする。

「ファイリングする一つひとつの活動を通して、現在行っていることと自分の将来ビジョンがどう関連しているのかを考えることが重要です。夢に向かって確実に進んでいると思えば、活動にも力が入ります。自分のしていることが夢とずれていると感じたら、ビジョンを実現するためにどうすればよいのか考えるきっかけにもなります」（小井戸先生）

「VISIONシート」は、日々の活動が将来にどうつながるのかを考えられる、羅針盤のような役割を果たしているのだ。

「生徒の進路先を決めることだけが進路指導ではありません。何よりも大切なのは、毎日の生活を自分でデザインする姿勢や力を育てることです。近年、アイデンティティーを見いだせないために、自分の将来を描けない生徒が増えています。まずは、日々の生活を自律して送れる力を付けることが必要であり、高校生活はそのための最後の機会となります。先生方にはそうした危機感を共有してほしいと思っています」（関根校長）

教科と関連した課題研究で 学びへの意欲を高める

総合学科らしさを追求するために、課題研究についてのテコ入れも図っている。かつては、3年生で週3コマ、テーマは生徒が各自で設定

して行っていた。しかし、テーマが広がりすぎてしまうこともあり、数年前に内容を進路学習などに絞り、1単位に縮小していた。そうした状況にあった課題研究を「YP2011」の活動の一環として位置付け直し、拡充したのだ。

特徴は、化学Ⅱや数学Ⅲなど教科の延長として「課題研究・化学Ⅱ」「課題研究・数学Ⅲ」という科目を設置したことだ。正課の内容を発展させる形で課題を設定し、学びへの意欲を高める方策を探っている。

「課題研究は、テーマそのものよりも、学習を通して自分が感じた課題を自分なりに解決する過程こそが重要だと考えています。通常の授業に関連付けることで、教師は指導しやすくなり、生徒も授業で学んだことを発展させる体験を通して、学ぶ意味や喜びを感じるようになるのではないかと考え、このような課題研究としました」（小井戸先生）

11年度は、書道Ⅱと数学Ⅲに課題研究の科目を設けた。次年度以降も拡充し、13年度には生徒全員が履修できる体制を整える予定だ。

自分の夢に向かって粘り強く 挑戦し続ける姿勢が生まれる

改革の成果は徐々に表れ始めている。09年度卒業生から地元の国公立大の合格者が増え、11年度はAO入試を利用した大学進学を目指す生

徒が前年よりも増えている。また、進路講話やガイダンス後に感想を書く場面では、これまで「○○が分かった」という内容が多かったが、「夢ファイル」を始めてからは「大変そうだがやりがいを感じた」など、自分の将来に結び付けて具体的に考えを書く生徒が増えている。

『ガイドンスブック』や『夢ファイル』などを通した指導の積み重ねにより、生徒が『ここに行きたい』という意志を強く持ち続けることが出来た結果ではないでしょうか。生徒には志望理由書や履歴書を何度も書き直させましたが、粘り強くついてくる生徒が増えたのも大きな変化です。与えられた課題を自分なりに解決しようとする姿勢は、社会に出てもからも大きな力になると期待しています」（鎌田先生）

教師の行動力もより一層高まっている。改革が進むうちに、自分から改革プランを提案する者が増えているという。

「生徒を自立に向かわせる支援や働き掛けをする上で、総合学科は大きな可能性を秘めています。その特性を生かして生徒一人ひとりの学習習慣や生活習慣を改善し、部活動の奨励や社会人としての自己形成を図り、『総合力』を育成することが目標です。今後、総合学科でできない取り組みを通して、真のキャリア教育の実現にチャレンジしていきたいと思っています」（関根校長）

今回のテーマに関連する過去の記事はBenesse教育研究開発センターのウェブサイトでご覧いただけます。

2010年6月号指導変革の軌跡「大分県立日田三隈高校」など

▶▶▶ <http://benesse.jp/berd/> → HOME > 情報誌ライブラリ(高校向け)